
姫さま、騎士と再会する

疋田 中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫さま、騎士と再会する

【Nコード】

N2041BA

【作者名】

疋田 中

【あらすじ】

病弱なお姫さまと、その騎士のお話。幸せになれなかった二人が、転生先でハッピーエンドを目指すお話。

（前書き）

登場人物が亡くなります。苦手な方は要注意。

「……騎士さま」

か細い声と共に伸ばされたやせ細った腕を騎士の手が支える。

「姫……」

病の床に臥した主の負担にならないよう、騎士はそつと声をかけた。

「騎士さま、わたくしはもう長くありません……」

主は、目を閉じたままつぶやくように言う。認めたくない、否定したい。けれど、病弱な主の体が、もう病に絶えられないことは、ずつと側で守ってきた騎士が良く知っていた。主に嘘のつけない彼は、黙って首を横に振ることしかできない。

「……ごめんなさい。いつか、遠乗りに行きましょうと、言ったのに」

馬に乗って見に行きたいと願った花畑は、見る事ができなかった。

自分で足を運んで菓子を選びたいと言っていた城下の菓子屋は、行くことができなかった。

ここ数年は、室内から出ることも稀になるくらい、彼女の体は弱っていた。

今はもう、起き上がることもできない。

「わたくし、次に目が覚めたら、きつとすっかり体が良くなっているの」

そうしたら、騎士さま。二人で遠くへ出かけましょう。木のぼりもしてみたいわ。夏の小川で水遊びをするのも、きつと楽しいでしょう。いろんなお店で食べ歩きをして、旅人に遠い国のお話をしてもらうの。

姫さまは、小さくかすれた声で、たくさんの楽しいことを語る。

「次に姫が目覚めたとき、私はきつとあなたの騎士として、あなた

を守りましょう」

そうして、姫。あなたを連れて何処にでも出かけましょう。遠乗りに行く前に、乗馬の練習をしましょうね。小川も良いですけど、海もきつと気に入りますよ。歩きながら食べるのは、お行儀が悪いと侍女に叱られそうですね。遠い国の衣装も、姫ならきつと似合うでしょう。

騎士は、涙で頬を濡らしながら、姫さまに応える。

二人は、来ることのなかった楽しい未来を語る。

いくつものやりたかったこと、見たかったもの、行きたかった場所を挙げ続ける。

いつしか、姫さまの声が聞こえなくなつて。

気付かないふりをした騎士の声だけが、語り続ける。

姫さまは幸せそうに笑つて、それを聞いていた。

もう開かれることのない姫さまの目から、雫がそつと流れて落ちて。

やがて、騎士の声も嗚咽に紛れて消えていった。

新品の幼稚園生の服に身を包んだ幼児が、ベージュのスーツに身を包んだ母親とビデオカメラを回す父親に手を引かれて歩いていた。仲の良い親子三人は、色とりどりのチューリップが咲く花壇の脇を通りぬける。足を踏み入れた小さな庭には、たくさんの遊具が並ん

でいた。カラフルな遊具には紙の飾りがつけられ、この目出度い日に相応しく華やかな空間を作り出している。

「入園おめでとうございます」

エプロンをつけた女性が、小さな胸に花飾りをつけた。ひまわり組と書かれた札も付いている。

花飾りのお礼を言うと、黄色い帽子を被った頭を撫でられる。この女性は「幼稚園の先生」だろう。恐らく、自分が所属するであろう「ひまわり組」を受け持つ人。愛想良く振舞っておいて損はない。（…いけない、これは幼児らしくない思考だ。）

腹のうちでそんなことを考えながら、表向きに見せるのは、下心など感じさせない満面の笑みだ。こんな風に笑うのは、手馴れている。

ただ、そんなことを悟らせて今生の父母を悲しませる気は無いから、今の自分は無邪気な幼児として振舞わなければならない。

「おとうさん、おかあさん、行ってくるね！」

父母の手を離し、自分と同じ黄色い帽子をかぶった集団に向けて駆けていく。傍から見ればひよこの集団のように見えるのだろうか、と思いながら、割り当てられた席に着いた。

入学式が終わった。

とても短い時間だったのは、じっとしてられない幼児に合わせたものだったのだろう。それでも、親を探して泣き出す者や話に飽きて席を立つ者も見受けられた。

かつての自分が幼少の頃はどうかであつたらうか。これほどに手の掛かる幼児ではなかったと思う。

「ひめ！！」

そう、かつての自分はお城のお姫様だったのだから。式典など日常茶飯事。

「ひめ、ようやくお会いできました！！」

まあ、体が弱くてほとんどでられなかったのだが。

そこまで考えて、ふと意識を現実に戻す。

目の前には、黄色い帽子を被ったちびっこが一人。妙にキラキラとした瞳で、自分を見上げている。

そう、見上げている。跪いて。

かつて、兄妹のように共にあった騎士が忠誠を誓う、あのポーズで。ああ、この男も生まれ変わったのか。前世の記憶を持ったまま再び会えたことは、素直に嬉しく思う。

「ひめ、きつとお会いできると、信じておりましたっ！」

目を潤ませて、感激しているのだらう。感情がもろに表に出る。

これは、そういう男だった。

だが、時と場所を考えると言ってやりたい。周囲から向けられる好奇の目が、わからないのか。

「ひめ、私をあなたの騎士にしてください。どんなことから、きつと守ってみせます！」

小さな手が、自分の同じく小さな手をとる。ああ、懐かしい。前世で騎士の誓いを受けたときの、このポーズ。自分の最後に聞いた、その言葉。

しかし、今世の騎士の親は、どんな思い出彼を育てたのだろうか。自分の子どもがこんなのだったら、ちよつと、いや、かなり嫌だ。

「私に、今世の名をお教え下さい。騎士の誓いをさせてください、ひめっ」

かつての主に再会して、興奮しているのだらう。紅潮している少年のほっぺたを掴んで左右に引っ張り、言ってやった。

「おれは、男だっ！ひめじゃなーーーーい！！！」

これは、かつて病弱だった姫さまとその騎士の、ハッピーエンドへのはじまり。のはず。

（後書き）

ちよつと出来心で書いてみました。

気がむいたら続きます。

続いたとしても、BLにはなりません（元姫と元騎士が恋仲になることはありません）。

誤字脱字など、ご指摘いただけましたらありがたいです。

感想など頂けたら、感激します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2041ba/>

姫さま、騎士と再会する

2012年1月5日02時46分発行